モチなし正月慣行[1]と社会構造
――奥会津一山間農村の事例に基づく考察――

社会学研究科社会学専攻博士後期課程修了
立柳　　聡

論文要旨

「モチなし正月」と呼ばれる慣行は、親族のあり方や村落の社会構造の形成や維持に、どのような機能を有するものであるかを、福島県金山町田沢の事例を踏まえて検討した。

当地の「モチなし正月」の慣行は、総本家格の家を含まない比較的小規模な特色を有する複数の同族に属する家々によって伝承されてきたことが判明した。同族制村落において、有力な同族の一員でないことは、不利な条件を背負うことになると考えられるが、これらの同族の家々は、「モチなし正月」の慣行を互いに共有することによって、総本家格の家が頂点となる有力な同族に属する家々とは異なる家同士としてアイデンティティを培い、まとまってそれらに伍する勢力を形づくり、保持してきたとみられる。当地の「モチなし正月」は、正にこうした家々にとって、互いに仲間であることを認識する共通の象徴として機能してきたものと考察した。

キーワード：モチなし正月、同族、対立、機能、象徴

目次

Ⅰ　問題の所在と考察の背景
Ⅱ　調査地と調査の概況
Ⅲ　田沢における祖先中心的な親族の組織化
　A　本分家関係にある家同士の特色
　B　本分家の系譜関係と同族
Ⅳ　「モチ正月」と「モチなし正月」の実態と伝承戸
　A　年迎えの準備と年越しの儀礼食
　B　正月三が日の儀礼食

Ⅵ　節分行事をめぐるT姓とW姓の家の取り組みの違い
Ⅴ　考察と結語

Ⅰ　問題の所在と考察の背景

「モチなし正月」とは、「元日を中心としたある期間に、餅を搗かず、食べず、供えずという禁忌を一つ、またはそれ以上、継承している家・一族・地域の正月のこと」[2]とされている。日本民俗学の礎を築いた大家の一人である折口信夫が、早くも昭和の初め頃にそれに関する論文[3]を草したほどに、古くから民俗学者や人類学者の関心を集めた慣行として知られる。その後も、例えば、直江広治は、「餅なし正月は、水稲栽培以前の日本の古層栽培文化複合といった問題に結びついてくるものと考えられる。」[4]と解説しているし、「モチなし正月」を手がかりに稲作単一文化論を見直し、複合文化的な日本文化論を展開した坪井洋文は、その始まりを縄文時代にまで遡って検討した。[5]斯学の発展に多々寄与した大物研究者たちが注目し続けてきた慣行であることがわかるが、その研究史をたどった安室知によれば、「研究者の関心の多くは、餅なし正月の起源に向けられていたといってよい。しかし、こうした起源論的な餅なし正月の理解とは別に、正月における「餅なし」の意味、つまり餅なし正月の機能についてそれを十分に解き明かした論考は少ない。」と総括している。[6]同感である。「機能」という言葉には、多義的な意味合いが含まれると思われるが、「モチなし正月」が、ある家の家例のみならず、一族や地域といった社会的単位に共有される慣わしであるとすれば、特に、当該伝承地村落の親族のあり方や社会構造全体の形成や維持にどのような機能を有するのであろうか。本発表は、そうした研究史の盲点を念頭に、筆者が福島県の奥会津地方に位置する一山間農村の民俗調査において見出した「モチなし正月」の一事例に基づいて、それを検討しようとするものである。

Ⅱ　調査地と調査の概況

伝承地である田沢は、福島県の西端、新潟県境に接する金山町の西部、横田地区を構成する字であり、一般には部落と呼ばれることが多いが、末端の行政区の一つとなっている。このため、行政上は田沢区であり、字の代表は区長と呼ばれる。（以下、主として、区、または、田沢と呼ぶ。）只見川に面した高台にあり、背後は山。ここに架かる田沢橋と山際を会津川口方向に延びる細い山道（但し、冬期は豪雪のために通行できない）だけが交通路となる典型的な袋村である。また、かつては冬に急病人が出れば、4キロ先の病院まで親戚縁者が力を合わせて橇で病人を運んだというほどの豪雪地帯に位置する自然村でもある。

金山町がまとめた『金山町史』によれば、田沢は、すでに近世に田沢村として存在し、天明2年の総人口は130名とある。また、明治時代の人口動態を手がかりに振り返ると、近世から今日まで、戸数には大きな変化がないことがわかる。区内における最新の家の創設は平成

に入っての1戸のみであり、長らく区を構成する家の顔ぶれが変わっていない安定したまとまりのよい地域社会を構成してきたと推測されよう。因みに、区内最古とみられる家はT姓の総本家である「上1」（世帯番号、以下同様）であり、伝承や墓石などの根拠に基づき、天正期（1573〜1592年）には存在したと伝わる。これと概ね同時期から存在したとされるのがW姓の総本家と伝わる「上5」であり、近世は代々名主を務めてきた。

しかし、1950年代に始まった只見川の電源開発に伴い、発電所で働く人が増えたものの、ダム建設以後の働き口の減少などで、離農、出稼ぎ、若い世代を中心とする離村が進み、人口減少が加速した。今日、福島県金山町は隣の昭和村と共に、全国一高齢化率の高い自治体の一つとまでなっているが、次第に、過疎化と人口の高齢化が進んでいった。

この結果、2011年11月末日現在の総戸数は18（但し、生活上の都合で家人は字を離れたが、家屋だけは残す家が他に3戸ある。内訳は、W姓が2戸、T姓が1戸である。）、総人口は43名、その平均年齢は63.8歳（10代は二人のみ、小中学生は存在しない）という少子高齢化の著しい字となっている。区内の姓は四つのみであり、現存する18戸の内分けは、W姓が13戸、T姓が3戸、B姓とI姓が各1戸である。I姓の1戸は、80年位前、人口減少によって離村を余儀なくされた隣の字からやってきた転入戸であるが、B姓の来歴は不明（現在まで未調査）である。特にT姓とW姓の家々は、各戸とも直接的な本分家関係を中心に、系譜関係やそれに基づく互いの地位について意識しており、T姓の各戸は、「上1」を源流とする本分家関係で結ばれた仲間の家々として、「T姓マキ」と称している。W姓の各戸も、「途中のつながりがよくわからなくなっているが…」などと称しつつ、W姓の源は「上5」であり、W姓の家々は、皆々そこから分岐したものだと一致して伝えており、T姓の家々にはみられない独自な慣わしをW姓のすべての家々で共有し、同姓の仲間同士として独自なアイデンティティを今なお伝えている。（Ⅵ章で詳述したい。）いずれも墓域の共同、一緒に祀る信仰対象の保持のような、同族一般に間々指摘される特色はみられないが、これら本分家の系譜関係を互いに認識する家々の集団の基本的な性格は、同族的なものと思われる。田沢は、そもそもT姓とW姓の二つの同族によって構成される自然村であったのだろう。[7]

区の内部は、概ね5戸程度ずつ、「上」、「中」、「下」「しも」の四つの組に分かれており、それぞれを代表する組長が置かれている。[8]なお、特定の同族に属する家々によってのみ構成された組はない。これらの上に立つ区全体の役員としては、区長、副区長、会計、庶務の担当者がおり、区の自治の中心をなしている。なお、これらの選任に際しては、特定の家筋が役職を占有することはなく、その時々の住民の年齢や立場などを考慮し、概ね順番交代制で適任とみられる者が選ばれる。この他、農事組合長、森林組合担当など、いくつかの役職者が存在するが、今日的には、区の役員や組長である人々が兼務する傾向にある。

インフォーマントが記憶する限りにおいて、戦前から昭和30年代前半（1950年代後半）頃までの主要な生業は養蚕とみられる。これを小規模な水田稲作と自給的な畑作が支えてきた。

林業や炭焼きは確認されない。概ね各戸が山林を保有しており、山林組合が結成されている。山は良質の山菜など、山の幸が豊富で、人々の生活を今でも支えている。また、かつては養蚕用の桑を栽培したり、概ね昭和30年頃までカノ（焼畑）が行われていた。カノの主要な栽培作物はソバとアワとみられる。常畑では、大根、白菜、豆、とうもろこし、とうきび、ジャガイモ、なすなど、日常食用野菜を中心に栽培が行われてきたほか、養蚕が盛んであった時代は、ここでも桑が育てられていた。

以上を総括すると、伝統的に経済的には小規模な農村であるが、共同体としての性格を強く保持した豪雪山間地帯の同族制村落の姿が浮かび上がってくるように思われる。

本稿は、こうした田沢区内の15戸の世帯調査から得られたデータに基づいている。なお、調査の時期は、2011年5月～11月であり、科研費基盤研究（C）MO21520823によるものである。

Ⅲ　田沢における祖先中心的な親族の組織化

以上を踏まえると、田沢の社会構造の形成と維持にあたり、伝統的に最も重要な影響を与えてきたものは、本分家関係と同族のあり方と推測されよう。そこで、この点の細部を検討してみたい。

A　本分家関係にある家同士の特色

田沢では、本家は「ホンケ」と呼ばれ、分家には特に名称はないと言われるが、筆者の調査では、折々に「シンタク」と呼ばれている。

筆者のこれまでの調査からは、両者の間に、以下のような特色が見られる。

① 伝統的には、「屋敷地や田畑、山林などの固定資産を分けることが分家すること」と理解されてきたとみられる。このため、本分家とされる家同士は、特に田畑、山林が隣接していることが普通とされる。

② 表1と2を踏まえて考えると、本分家の経済的な力量には、突出した違いがないと思われることである。本家格の家でも3反部程度の田畑しか持たない例もあり、実際、本家格の家よりも田畑を所有する分家格の家も存在する 。この事情は、分家の際の財産分与の特色に由来するものと思われる。その事情が判明した3例[9] についてみると、本家の田畑、山林の3分の1～2分の1が分家に贈与されている。おそらくは、耕地が限られ、相当量の田畑を分与しないと分家が生きていけないため、伝統的に均分相続が行われてきたのではなかろうか。この結果、本分家間の経済力は近似することになったとの仮説を提示しておきたい。

③ 「しも20」と「下15」の事例に端的なように、互いに本分家関係にあると認識しながら、いずれが系譜の本末がはっきりしない事例が存在することである。

表１　家格別にみた田の所有面積

n＝１３（戸）

田の面積 単位：　反	家格と戸数		
	本家	分家 / 本家でもある分家	孫分家
８以上	1	0	0
７以上	1	0	0
６以上	1	１ / １	0
５以上	0	0	0
４以上	1	２ / ０	0
３以上	1	１ / １	0
２以上	0	０ / １	0
１以上	0	0	1
合計	5	４ / ３	1
備考	「しも２０」と「下１５」は、系譜の本末関係が明確ではなく、共に本家とした。		

※　７反部以上を有する２戸は、T 姓の「上１」と W 姓の「上５」であって、本家というよりも、総本家であり、例外的な事例と思われる。

表２　家格別にみた畑の所有面積

n＝１３（戸）

畑の面積 単位：　反	家格と戸数		
	本家	分家 / 本家でもある分家	孫分家
１０反＝１町	1	0	0
９以上	0	0	0
８以上	0	0	0
７以上	1	0	0
６以上	0	１ / ０	0
５以上	0	１ / ０	0
４以上	0	0	0
３以上	2	１ / １	0
２以上	0	０ / １	0
１以上	0	１ / ２	0
１未満	0	0	1
合計	4	４ / ４	1
備考	「しも２０」と「下１５」は、系譜の本末関係が明確ではなく、共に本家とした。		

※　７反部以上を有する２戸は、T 姓の「上１」と W 姓の「上５」であって、本家というよりも、総本家であり、例外的な事例と思われる。

B　本分家の系譜関係と同族

表3は、W姓とT姓の家々について、その系譜を明らかにすると共に、同族の範囲を表したものである。これを踏まえ、当地の同族の特色を検討してみよう。

第一の特色は、W姓の上5を総本家とする同族こそ、6戸（絶家を除く）から構成されているが、他は、直接的な本分家関係にある家同士を主体に、2～3戸による構成であり、集団の規模が小さいとみられることである。

第二の特色は、Ⅵ章で触れるように、W姓の家々は、T姓の家々にはみられない独自な慣わしをW姓のすべての家々で共有し、同姓の仲間同士として独自なアイデンティティを今なお伝えているものの、現状は、四つの同族に分派していることである。

第三の特色は、W姓の四つの同族の内、少なくとも①と①分の同族の間には、同姓の誼を認識しつつ、対立的な関係も認められることである。

表３　W 姓と T 性の各戸の本分家関係と同族

姓	同族	本分家関係　※　文字・数字＝組名・世帯番号 ＋番号：　分家してからの世代数	備考
W	①	上５　＋８　下１２　＋５　中１１ ＋４以上　下１３（絶家）　＋３　下２１ （　「①分」同族　） ＋４以上　上４　＋４以上　中１０ ＋５～６　上３ ＋４　中６　＋？　中７ ＋２　した１６（絶家）	「下１２」以下の４戸（「下１２」、「中１１」、「下１３」、「下２１」）は、独立したグループと自認している[10]ので、別途「①分」同族と分類する。
	②	しも２０　＋？　下１５	本分家の立場は逆の可能性もある。
	③	中８　＋３　中９	中９はしも２０の分家とも言われている。
T	④	上１　＋５以上　上２ ＋？　しも１８　＋３　しも１９（絶家）	「T 姓マキ」と称している。

結局、同族を単位としてみた場合、田沢には、三つの主要な家々の集団が存在し、関係戸を束ねていると見なしうるであろう。

Ⅳ 「モチ正月」と「モチなし正月」の実態と伝承戸

A 年迎えの準備と年越しの儀礼食

次に、田沢における年迎えから正月三が日の慣わしを、儀礼食を中心に検討してみたい。

田沢の各戸は、伝統的には12月30日にモチ搗きを行い、31日に神棚にお供えをする点では、凡そ共通している。(28日に搗くこともあったとするインフォーマントもいる。) しかし、「モチなし正月」の慣行を有する家では、その後、食するためのモチは、少なくとも元日の午前中までは蔵等にしまってしまう。(古い時代には、元日の内はしまっていたとする説や三が日の間しまっていたとする説もある。)

こうして大晦日の夜を迎えることになるが、年越しの儀礼食としては、各戸ともモチは食べない点で共通している。表4は、田沢の各戸の年越しの儀礼食を一覧にしたものである。大きくは、「ソバを重視する」家と「ご飯を重視する」家という二つの類型、もしくは、「サケを用いる」家と「サケを用いない」家という二つの類型を抽出できそうであるが、納豆を用いる家や、特に決まりはないとする家もあり、バリエーションが確認される。なお、社会構造との関係を念頭に、あえて表3と突き合わせて検討すれば、総本家格や本家格の家には、「ご飯を重視する」傾向がみられると言えよう。また、後掲の検討との関連で、表4には、表3に準拠して各戸の姓と属している同属についても紹介しているが、はっきりとした相関関係は把握できないとみられる。年越しの儀礼食をめぐる実態は、各戸の家例と考えられよう。

表４　世帯別にみた年越しの晩の儀礼食の違い

組	世帯番号	儀礼食の実態	姓と 所属する同族	備考
上	1	ご飯、サケかマス	T④	
	2	ソバ	T④	
	3	不明	W①	調査不能で未調査
	4	ご飯、サケ	W①	
	5	ご飯	W①	
中	6	ご飯、ソバ、サケ	W①	
	7	不明	W①	調査不能で未調査
	8	ご飯、納豆	W③	
	9	ご飯、サケ	W③	
	１０	特に決まりなし	W①	
	１１	ソバ	W①分	
下	１２	ご飯、赤い色の魚	W①分	
	１３	不明	W①分	絶家のため未調査
	１４	不明	I なし	転入戸、本件未調査
	１５	特に決まりなし	W②	
	２１	ソバ、サケ	W①分	区内最新の創設戸
しも	１６	不明	W①	絶家のため未調査
	１７	不明	B なし	調査不能で未調査
	１８	ソバ	T④	
	１９	不明	T④	絶家のため未調査
	２０	ソバ	W②	

B　正月三が日の儀礼食

そして、年明けとなり、正月三が日を迎えると、特にモチの扱いをめぐって状況は一変する。三が日の儀礼食に積極的にモチを用いる慣わしを、便宜的に「モチ正月」と呼ぶことにすると、田沢においては、この慣行を有する家々が多数派であり、その実態は、概ね以下のようなものである。

「モチ正月」：　正月三が日、元旦と二日の朝は雑煮を食べ、三日の朝はトロロ飯を食べる。昼と夜は自由であって、各戸の習いに従っていろいろなものを食する。

田沢では、雑煮の中心的な具材としてモチが不可欠とされており、雑煮として積極的にモチを食する慣わしとなっているのである。ところが、これに反して、元日、特に朝は、絶対に雑煮（モチ）を食べないという禁忌を有する家々が存在する。正に「モチなし正月」の慣わしである。

表5は、家屋だけを残し、絶家となっている3戸を含め、田沢に所在する21戸の正月三が日における儀礼食の実態を一覧にしたものである。「モチ正月」による場合は、モチを用いるため、「あり」と表記している。同様に、「モチなし正月」の場合は、「なし」としている。

また、田沢の社会構造の形成と維持にあたり、伝統的に最も重要な影響を与えてきたものは、本分家関係と同族のあり方とみる仮設を踏まえ、それとの相関を考察するために、「姓と所属する同族」の項目を設け、各戸について当該事項を記入している。

一方、表6は、「モチなし正月」の慣行を有する各戸におけるその実態を一覧にしたものである。これら二つの表を踏まえて検討してみたい。

表５　世帯別にみた「モチ正月」と「モチなし正月」の違い

組	世帯番号	モチを用いる（「モチ正月」）か 用いない（「モチなし正月」）か	姓と 所属する同族	備考
上	1	あり	T④	
	2	あり	T④	
	3	不明	W①	調査不能で未調査
	4	あり	W①	
	5	あり	W①	
中	6	あり	W①	
	7	不明	W①	調査不能で未調査
	8	なし	W③	
	9	なし	W③	
	１０	あり	W①	
	１１	なし	W①分	
下	１２	なし	W①分	
	１３	不明	W①分	絶家のため未調査
	１４	あり	I なし	転入戸
	１５	あり	W②	
	２１	あり	W①分	区内最新の創設戸
しも	１６	不明	W①	絶家のため未調査
	１７	不明	B なし	調査不能で未調査
	１８	あり	T④	
	１９	不明	T④	絶家のため未調査
	２０	なし	W②	

表６　モチなし正月の実態

伝承戸 （世帯番号）	慣わしの詳細	所属する 同族
中８	うちは元日に餅を食べたことない。その代わり、餅でなければ何でもよい。二日にはよい。餅を食べる。三日の朝はトロロ飯。	W③
中９	正月三が日はもっぱら粥を食べる。	W③
中１１	年とりの晩はソバ。正月元日は餅を食べない。本家も食べない。餅は搗くが神棚にも餅を供えない。午前中は食べない。二日になって雑煮を作る。三日はトロロ飯（まんま）。	W①分
下１２	元日の朝は雑煮を食べない。ひーじい様が小さい頃、大腹痛みをして、長生きできないと思ったそうだ。そこで、４０までは生きたいからと、正月の餅は断つから長生きさせてほしいと願かけした。その後、農兵だったが武士の真似事をして切腹した。その時から元日は餅を食べないことにした。うちの系統の W 姓の家の内、下１３を除き、みんなで決めた。二日、三日は問題ない。二日の日は雑煮を食べる。三日の日は、「三日トロロ」。餅は暮に搗いておく。	W①分
しも２０	餅を搗いてはいけない日はないが、元旦の朝は、うちは餅を食べない。先祖が餅をのどに詰まらせたので。代わりにご飯を食べる。他の三が日には決まりはない。神棚にも餅を飾る。ご飯も毎日あげる。	W②

表5から判明することは以下である。

① 「モチなし正月」の慣行を有する家は、W姓の同族としては最大規模のW①同族とT④同族には存在しない。

② 「モチなし正月」の慣行を有する家は、W①同族と対立的な関係も有するW①分同族、いずれも2戸から構成され、最少規模であると共に、W姓の家の始祖とされる上5との系譜的なつながりが明確ではない家々によって構成される同族であるW②同族、W③同族のいずれかに属している。

③　W②同族のように、本分家で慣わしが異なる場合もある。

④　田を比較的多く所有するT姓とW姓の総本家が存在し、当該地の草分けであったとみられる「上」組には、「モチなし正月」の家は存在しない。「モチなし正月」は、概ねW姓の本家格、分家格の家々を伝承母体とする慣行であるとみられる。

同様に、表6から判明することは以下である。

①　W①分同族は、「モチなし正月」の慣行を同族として保持していくことを合議して決めた経緯を持っており、また、中11のように、神棚にモチを供えることを拒否する家も存在することに象徴的とみられるが、モチに対し、極めて強い禁忌を有しているとみられる。[11]

② 一方、W②同族のように、「モチなし正月」が同族全体で保持される共通な慣わしになっていない事例も存在する。「モチなし正月」に対するこだわりの強さは、同族によって違いがあるとみられる。

Ⅵ 節分行事をめぐるT姓とW姓の家の取り組みの違い

問題の考察を深める上で有益な示唆を与えるものと考えることから、もう一つ、年中行事をめぐる知見を紹介しておきたい。

正月から間もなくやってくる節分は、一般に、鬼払いの豆まきの行事として知られている。この点は田沢でも違いはないが、W姓の家々は、揃って豆まきを行わない。この背景として、以下のような話が伝承されている。

「W姓である上5の始祖が、昔、鬼退治を成し遂げたから、そこに連なるW姓の家の人間は、皆々鬼に強いとされている。」

「W姓の先祖が鬼の腕を切ってきたと伝わる。T姓はまくので、豆をもらいに行った。」

つまり、W姓の家々は、言わば「豆なし節分」とでも呼ぶような習いを例外なく共有し、それを介して、T姓との違いや共通のアイデンティティを確認しているとみられるのである。

Ⅴ 考察と結語

以上を踏まえ、田沢における「モチなし正月」と親族のあり方や社会構造全体の形成や維持との相関を考察してみたい。

田沢は、伝統的に概ねT姓とW姓の家々からなる同族制村落として歩んできたとみられる。その上で、T姓の家々は「T姓マキ」と称して一つの同族（T④）を形成してきたが、その4倍もの数に達するW姓の家々は、いずれの家も遡れば上5を本源として連なるとする認識や、T姓の家々とは異なる慣わしを共有して、同姓の誼や共通のアイデンティティを保持しつつ、実態的には、複数の同族に分属して存在している。しかも、それらの間には、一部で過去には対立的な関係も認められる。上5の最古の分家（下12）は、それを総本家とする同族（W①）から分派し、自らを総本家とする新たな同族（W①分）を形成して結束を強め、折々にW①と対抗的に存在してきた。このため、W①分が成立して以降の田沢における自治や統制は、多くの場合、W①、W①分、T④という三つの同族によって担われてきたと捉えることが妥当と思われる。

こうした状況の下で、「モチなし正月」の慣行は、上5を総本家としないW①分とW②、W③に属する家々によって伝承されてきたとみられる。現存するこれらの伝承戸の総数は5戸となるが、同様にW①を構成する家の数は、6戸である。概ね勢力として拮抗しているとみられるのではなかろうか。

W①分の家々は、「モチなし正月」の共有と伝承を合議して決めたほど、それに対する一

際強いこだわりを有するとみられると共に、W①に対し、対立・対抗的な勢力でもある。

また、W②とW③は、極めて小規模な同族であって、しかもW姓でありながら、上5との明確な系譜的なつながりを確認できない状況にある。政治的には、区内で弱い立場に置かれてきたと推測されよう。W①分とW②・W③には利害関係の一致があったとみられよう。

さらには、W①分、W②、W③の家々は、すべて「中」、「下」、「しも」のいずれかの組に属しており、田沢の草分けとみられる「上」に属さない本家格、分家格の家同士という共通点もある。草分けの権威に対抗する意図があったかまでは定かでないが、結束しやすい似た境遇もあったとみられよう。

結局、「モチなし正月」の慣行は、W①に属さないW姓の家々にとって、それとは異なる仲間同士であることを示す共通の象徴となっていたのではないだろうか。同族制村落という社会構造の特色を有する田沢において、有力な同族の一員でないことは不利であったはずである。当地の「モチなし正月」の慣行は、その共有を介して、比較的弱い立場の同族や草分けではない家々を束ね、有力な同族に伍する勢力を形成する上で、重要な機能を有するものであったと考察する。更なる検証を進めていきたい。

1　「もち」を表現する漢字は「餅」のみならず、実は、「糯」など複数あり、微妙にそれらの意味するところに違いが知られる。また、ねばねばとした食べものの性質や食感を表現する場合もある。また、筆者のこれまでの民俗調査経験に照らせば、正月の供え物や儀礼食となる「もち」は、米が材質となるものばかりではない。「もち」を漢字によって厳密に表現することには結構難しさがある。また、「モチなし正月」は正月における一種の慣わしであって、本質は民俗である。民俗を意味する用語や方言は、通常、カタカナで表記することも念頭に、本稿では、カタカナをもって、「モチ」と表記すると共に、民俗たる慣わしであることを最初に強調しておく意味で、「モチなし正月慣行」とした。

2　安室知、2000年、「もちなししょうがつ　餅なし正月」、『日本民俗大事典』下、吉川弘文館、p.696

3　折口信夫、1929年、「餅つかぬ家」、『旅と伝説』、第2巻11

4　直江広治、1972年、「もちなししょうがつ　餅無し正月」、大塚民俗学会編、『日本民俗事典』、p.736

5　坪井洋文、1979年、『イモと日本人』、並びに、1982年、『稲を選んだ日本人』、いずれも未来社

6　安室知、1999年、『餅と日本人』、雄山閣出版、p.105

7　こうした当地の本分家集団の特色と背景の詳細は、以下で検討した。立柳聡、2012年、「奥会津一山間農村における親族の組織化に関する一考察　―「ナカマレイ」の構

造と背景―」、『島嶼コミュニティ研究』、第1号、pp.3-20

8　田を比較的多く保有する総本家格の家が複数位置しているなど、所在する家の来歴や財産の保有状況から見て、田沢は「上」組から開けていったものと思われる。なお、輪番や回覧は、「上」→「中」→「下」→「しも」の順である。

9　「上5」から「下12」が分家した例、「中8」から「中9」が分家した例、「上5」から「しも16」が分家した例。

10　下12は、上5の最古の分家であり、上5から財産の半分を分与されて分家になったが、2代目の世帯主の時代に、この財産分与をめぐって上5と争いになり、以降、本分家の付き合いをしなくなったと伝わる。以降、「W姓は二派になった」と認識されている。

11　W①分同族の仲間である下21は、「モチ正月」の慣わしとなっているが、筆者の調査によれば、平成に入ってからの新しい分家であって、古くからの伝統にこだわりも薄く、世間一般に、正月はモチを食することが多いことから、それに習って対応しているようである。例外的な事例であろう。

Mochinashi-shogatsu (custom not eating rice cake on New Year's Day in Japan) and Social Structure: A study based on the case in a Mountain Community in the Oku-Aizu Region, Japan

TACHIYANAGI, Satoshi

Abstract

Though Japanese eat rice cake on New Year's Day usually, some of them are not eating or there are households not eating as a custom nationally. Generally it is called *Mochinashi-shogatsu*. Why? Many famous folklorists and anthropologists have been interested in it and researched for a long time.

But the most part of them are studies on the origin of it and little studies researched on the function, especially to construct and maintain social structure of community. The target of this paper is to clear it based on the case in Tazawa, a mountain community in Oku-Aizu, Fukushima prefecture.

Tazawa is a community constructed by plural descent group called *Dozoku*. Each household belongs to any of them. *Dozoku* has function of mutual help in daily life and is also a political system to promote self-administration in community. Accordingly for each household, to be a member of influential *Dozoku* is advantageously. But if can't become so, maybe these households will aim to form their group originally or ally and make effort to have influence to community.

In Tazawa, households that preserve *Mochinashi-shougatu* as a custom are branch family in all and belong to some of small and weak *Dozoku* separately. They don't have any bond to exert social influence or chance to ally and are in a handicapped position in the community.

Under this situation, for these households, preserving *Mochinashi-shougatu* as a custom is only in common or friendship, as we Japanese call Yoshimi, to form a group or ally. In fact, for example, one of small and weak *Dozoku* decided to preserve *Mochinasshi-shogatsu* in their group in former days and has kept.

I think, for them, preserving *Mochinashi-shougatu* is common symbol as mate of household that isn't a member of any influential *Dozoku* mutually and band together.

This is a social function of *Mochinashi-shogatu* to construct and maintain social structure

of community. It is my conclusion.

Key words: *Mochinashi-shogatsu, Dozoku*, opposition, social function, symbol